

## 論文審査の結果の要旨

氏名：ミシェル・カナアン

博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）

論文題名：グラフィックな形式を用いたパーソナルナラティブの共有に関する研究 ルーシー・サリバン  
の「Barking」とデイビッド・スモールによる「Stitches」に関する研究を通じて

審査委員：（主 査） 教授 森 香 織

（副 査） 教授 木 村 政 司 筑波大学名誉教授 西 川 潔

本論文は世界で最初のグラフィックノベル作家であるルーシー・サリバンとデイビッド・スモールの2人のクリエイターの制作プロセスを研究対象として分析し、その物語の構築や独特な視覚スタイルの確立を通してグラフィックな形式でパーソナルナラティブを伝えるためのメリットや課題、新規性のあるアプローチなどを提案し、個人的な物語を共有する理想的な媒体としてのグラフィックノベルのあり方について論ずるものである。

この研究の方向性とその深化に関しては論者の個人的な体験が大きく影響をしている。修了研究～博士課程の前半までは、いわゆる一般的な子供向けの絵本では取り上げられない、貧困・差別・虐待・家庭内暴力・格差などの社会的人生哲学的なテーマを、文章を入れずに展開するソフィスティケイテッド・ピクチャーブックスを研究の対象に取り上げ、それらの新しいジャンルの確立と意義について深く研究を進めてきた。昨年度以来のパンデミックによる社会状況の変化は、感染＝死という恐怖の実現を予感させ、自身が幼少期に抱えていた「心気症」がコロナウイルスに対する恐怖として再発し、その具体的症状として眼球の不具合を発症するに至った。その治療のために一時的に故国に帰り家族に囲まれた生活を送るうちに、心の不調と自らの辛い過去を乗り越え、その衝撃的な体験を創作として残したいと考えるようになり、同時に一人の人間の過去をめぐるメモワールとしてのソフィスティケイテッド・ピクチャーブックスのあり方を再構築する方向に至った。

そのためこの研究は、より現実的な内容と展開を繰り広げるグラフィックノベルを対象とするようになり、その具体的事例としてルーシー・サリバンの『Barking』とデイビッド・スモールの『Stitches』という2作品を取り上げ、作中の主人公が受ける心の痛みの表現を具体的に分析していくことでグラフィックノベルの意義を探究し、そのプロセスとしての自身の体験を基にした創作表現を合わせて発表することが研究の両輪となっている。グラフィックノベルの総論を論じることよりも2人の作家の例を基に創作の方法論や視覚スタイル確立のエビデンスを検証し、理想的な媒体としてのグラフィックノベルのあり方を提案することが博士論文の内容であり、それを実証するものとして創作成果物『What if it Goes from Bad to Worse?』が提示されている。論文の中でセルフ・セラピーとしての創作について論述もしているが、この博士論文は論者の作品の解説ではなく、同様に作品はクリエイションとして独立した別物として捉えているため、あえて論文の中では作品の内容に関しては言及していない。

論文の構成は「第1章：はじめに」「第2章：用語と定義」「第3章：ルーシー・サリバンの『Barking』とデイビッド・スモールの『Stitches』に関する研究」「第4章：グラフィック形式でのパーソナルナラティブの共有：課題と利点」「第5章：結論」である。

「第1章：はじめに」では、研究の動機と方法、意義と目的が明示されている。日本では「マンガ」、アメリカでは「コミック」、フランスでは「バンド・デシネ」と称されている、絵によって綴られる物語の世界にグラフィックノベルと命名されたジャンルが登場した背景をウィル・アイズナーの『A Contract With God』を紐解きながら概説し、アート・スピーゲルマンの『Maus』がグラフィックノベルとして初めてピューリッツァー賞を受賞したことで、グラフィックノベルにおけるユニークなストーリーテリングの方法が顕在化したこと、やがてそこからグラフィックノベリストと呼ばれる世代が出現してきたことに触れ、これらの新しい潮流に対して体系的な研究がなされておらず、その必要性

があること、これらの作品群が抱える難しいテーマをどのようにソフィスティケイテッドに描写表現するのか、という命題を解決することに意義を見出し、2人の作家の具体例を基に考察を進める方針について述べている。この論文は作家論ではなく、これからストーリーテラーとしてパーソナル・ナラティブを生かした創作を試みる者を対象に、グラフィックノベルが如何に有効なメディアであるかを論証する試みであり、そのために創作のプロセスを詳らかにすることが研究の目的であり、理想的なあり方の提案と共有が本論の結論になる。

「第2章：用語と定義」では、グラフィックノベルとコミックの本質について「グラフィックノベル」という命名の経過から言葉の定義を行い、多数の作家の先行研究例によって検討考察をしている。ここで論者は、コミックブックは読者を作者のビジョンの中に取り入れることのできるプライベートなメディアであり、1対1のコミュニケーションを構築することによってどのようなジャンルのストーリーテリングも可能になる有効性を説き、それゆえ大衆的なアートという側面よりも最高の文学形式になり得ることを看破している。実際、コミックとグラフィックノベルの間に存在する相違は微妙であり、厳密に定義付けを行うことが本論の目的ではない。本論文では特定なタイプのコミックを論証する際にグラフィックノベルという形容を使用し、作者の個人的な経験に基づいたストーリーを描く長編をコミック、と定義付けしている。この第2章では、グラフィックノベルのサブジャンルのカテゴリー分けも提案しており、コミックがヘルスケアで果たせる役割を示す新しい用語として「グラフィックメディオン」を取り上げ、以降の論述で対象とする2人の作家の作品もこの新しいジャンルに包括されていることを肯定している。

「第3章：ルーシー・サリバンの『Barking』とデイビッド・スモールの『Stitches』に関する研究」ではサリバンとスモールの作品の具体的分析を、ストーリーテリングの特徴やモノクロームに限定した描画の個性、各種感情の表現、心象風景や比喻、映画の影響を受けたアングル設定など、あらゆる角度から詳細に行なっている。これらの考察は一見すると作品の解説の形を取ってはいるが、論者自身の論拠であり、今までの研鑽の末に紡ぎ出された本人の創作論でもある。特に『Barking』におけるコマ割りの特性やレタリング、フローティングワードに関する検証と『Stitches』における言葉の無いストーリーテリングのインパクトの強さと自由な解釈に関する分析は説得力がある。

「第4章：グラフィック形式でのパーソナルナラティブの共有：課題と利点」では、スモールとサリバンの創作理念の違いを明らかにし、パーソナルナラティブのメディオン的な利点と避けられない問題点を提起している。スモールが過去の不幸を乗り越える自己治療の一環として創画してきたのに対し、サリバンは鬱病というテーマとその治療の困難さを明みにし社会に問うために作品を発表した。この違いについて論者は、自ら乗り越えることでのカタルシス（利点）と悲劇のフラッシュバック（課題）とに置き換えて考察をし、第5章結論に導いている。

「第5章：結論」では、グラフィックノベルに関する独自の知見を5点挙げ、それらが他者と繋がり共有することで世界の変革に積極的に貢献できるメディアであることを検証し、個人的な体験を物語として共有できる理想的な媒体と位置づけ、その新しいあり方を提案している。この一連の考察結果は創作者としての立場からグラフィックノベルの構成を検証した意欲的な論文であり、理論検証を進めるほどに創作への反映の意思が高まり、論文考証とは違った次元での結論の具体的提示となった。

『What if it Goes from Bad to Worse?』（邦題：「もっと悪くなったら、どうしよう？」）というタイトルで取り組んだ博士研究創作成果物は、結果的にルーシー・サリバンとデイビッド・スモールを探究しているうちに、自らのグラフィックノベルへのめり込んでいった過程である。それは、自らの病気体験とコロナ禍の中での自己肯定感に反発する自身の葛藤から生み出されたものとなった。

創作表現は、研究初期から察するに論者の精神状態の変化が描写表現の繊細なタッチの変化へと同調していることが明白である。サリバンとスモールの描写のインパクトの強さとは違った表現探しを敢えてすることなく、自らの心をモチーフに表現方法を試みた結果、鉛筆によるグラデーションの緻密さを駆使し、その強さと弱さをコントロールしたオリジナリティ溢れる新しいメモワールが完成した。繊細さと緻密さ、その艶かしさと恐怖、本人が異常なほどにこだわった描写能力が、自身の精神状況か

ら生まれていることさえ気づかずに、心をフリーズさせながら手を動かしていたように感じられ、グレイトーンで統一した独特な表現とストーリーからは、叫びのない悲鳴が聞こえてくる。

この研究を通じて自分を見つめる過程で、描写としての自らの内面をえぐり出すが如く試みた創作成果は、見るものに精神的な悩ましさと相反する勇気までも与えてくれる衝撃的な作品となった。それは、技術をはるかに超えたパーソナルナラティブ・グラフィックノベルの誕生とも言える。

論者の描写表現技術の高度化と、その恐ろしいまでの自己否定感から自己肯定感へのトランスフォーメーションからは、グラフィックノベルとして如何に上質な完成度と新規性のある創作を成し遂げたかが見てとれ、今後の研究と創作活動のさらなる発展が期待される。

よって本論文は、博士（芸術学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

令和4年2月2日